

想像力を持って

県内市立中学校 本人の希望により学年・氏名は掲載しません

僕には明るくて頼もしい友達がいる。保育園からもう十年になるとても仲のよい友達だ。外やオンラインゲームで遊ぶこともあった。僕が一番印象に残っているのは、日曜日にその子とほかの友達と一緒に小学校の校庭で遊んだことである。王様ゲームやゲーム機で時間を忘れるほど熱中して遊んだ。放課後も休日も夏休みも友達と遊ぶことがあまりなかった僕にとってその時間は特別なものだった。友達が「かっちゃん、一緒に遊ばない？」と誘ってくれたとき本当に、本当に喜んだのを覚えている。その子は僕が頼ることのできる大切な友達なのだ。

ところが、中学校に入って数ヶ月、そんな友達がだんだんと学校へ来る回数が減ってしまった。最初はあまり心配していなかったが、数日来ない日が続くと何かあったのかなと心配になった。今までそんなことはなかったからだ。親しい友達だから余計に心配になった。

僕はオンラインゲームを通じて友達に聞いてみることにした。「何かあったの？」と僕は尋ねてみた。すると友達は自分でもどうしてかよくわからないけれど心がどことなく沈んでいること、辛いと感じていることを打ち明けてくれた。

友達との話を終えた後、僕は今までのその子について考えてみた。友達はいつもと変わらず明るく何も変わっていないように見えた。だが、表に出さなかっただけで心はずっしりと重く暗かったのかもしれない。僕は友達の異変に気付けなかったことがショックだった。もしかしたら自分ばかりが友達を頼っていたのかもしれない、と思った。では、どうしたら友達の役に立てるだろうかと僕は考えた。

僕は、オンラインゲームを通じて友達と雑談をすることにした。会いに行くことは難しいけれど話を聞くことで少しでも友達の辛さを軽くできたらいいなと思ったからだ。ゲームのこと、ドラマのこと、学校のこと。たわいない話をこれまでこんなに話したことがないというくらい、たくさん話した。友達の考えていることや思っていること、好きなことを知ることができた。ゲームから出るとき友達から今日はありがとうときた。この「ありがとう」という言葉は今でも忘れない。

友達からの「ありがとう」は僕の心を温めて、活力を与えてくれた。誰かのために考えたり、行動したりすることは自分やほかの心を温かくする力を持っていて、その温かくする力はまた新しい行動をおこしていく。ここから僕はそう感じた。

そしてこのサイクルは人権を守ることにつながるのではないだろうか。一人ひとりが温かさを持って周りの人に接していくことで、誰もが過ごしやすく、よりよい社会ができていくはずだ。

しかし、よりよい社会を作るのはとても大変なことだと思う。もしも何か人のために動こうとしても勇気が出なかったり、「ほかの人がやってくれるから大丈夫だろう」と思ったりすることで行動できないこともあると思うからだ。僕も自分からとっさに行動できることは少ない。けれど、その考え方を変えていかなければ人権は守られない。また、過ごしやすい社会とはいえないと思う。

僕は考えかたをなおすためには相手のことを思いやるための想像力が大切だと思う。僕の好きな『「また、必ず会おう」と誰もが言った。』という本のあとがきで作者である喜多川泰さんはこう語っている。

「今の時代、一人ひとりに求められているのは「生きる力」です。

そして「生きる力」とは「想像力」。

どんな世の中になろうとも、どんな状況になろうとも、今できることは無限にあります。問題は「今できることは無限にある」と思えるだけの想像力が育てられているかどうかです。」

これからの世の中の生きる力とは、どんな状況でも、自分にはなにかしらできることが無限にあると想像する力。これは、温かい気持ちや行動でも、どんな状況になっても、なにかしらできることがあると思えることが大事だということだ。勇気がでないときでも、他の人がやってくれると思うときでも、想像力をやしなって自分にできることを考えていきたい。